

『出逢い・・・』

—MRAと私—

No.2



社団法人 国際MRA 日本協会

『出逢い……』MRAと私―第二集 発刊に寄せて

尾崎行雄記念財団副会長 相馬雪香

此の度、『出逢い……』MRAと私―第二集を皆様にお届け出来ますことを心から喜びとしております。

MRAとは、誰でもいつでも始められる『生き方』の提唱なのです。エム・アール・エーと聞くと、いかにもバタ臭く感じられる向きもあつたり、『道徳再武装』という邦訳が、平和を念じている者に違和感を与える感が無きにしても非ずですが、この小冊子に収録された文章をお読み下されば、MRAというものは決して難しい理論ではなく、人間の誰にでも共通な極く自然の感情（羨望、憎しみ、傲り、自己憐憫等々）に負けるのでなく、打ち克つ道、生き方というものを私達に示しているのだということが良くお分り頂けることと思います。

MRAは古くから洋の東西を問わず認められてきた真理に新しい衣を着せ、極めて分かり易く、やる気さえあれば誰にでも実行出来る単純な処方を提供しております。今日は、今まで考えられなかった程多くの、そして新しい難題が世界に充満しておりますが、どんなに素晴らしい制度を編み出し技術を開発しても、それを運用する人の心が曲がっていないだけでは解決にならないことははっきりしております。家庭、社会、国家、そして世界を構成する最も大切な素材は「人」であり、相手のあやまちを指摘するのをやめて自分のあやまちを認める時、人は変わりそして社会が変わり始める、つまり私達「一人ひとりのあり方が国のあり方」なのだMRAは言っております。どうぞご家族や友人の方々にも一読をお薦め下さい。



目次

心の声に従い、実行する	中畑婦幹…… 1 P
日韓友好の懸け橋に	大木一郎…… 8 P
スイス・コーで学んだ静かな時間	内山順恵……15 P
頑固は自分の持ち味だ！	長島範明……20 P
最高の出逢い	泉 潔子……26 P



心の声に従い、
実行する

中畑婦幹
なかはた ふみき

今年の六月で、主人が国鉄のOB会の帰途、有楽町駅で急逝^{きゅうせい}してから満十三年に
なります。

昭和二十八年の夏、国鉄の上司であった片岡義信様の推薦で、スイス、フランス、
ドイツ、イギリス、アメリカなどでMRA（注1）の会議に参加し訓練を受けるた
め、六十日間にわたり海外出張をさせて頂いた主人は、MRAの創始者フランク・
ブックマン博士（注2）の優しい目を一生忘れることはないだろうと、大変感動し
て帰国しました。

平素無口で私達家族には何も強制しない寛容な性格の主人でしたが、M R Aの会合にだけはいつも同伴を求められました。

初めは主人が変わればよい、自分が変わるところなどないと傲慢ごうまんに考えていた私でしたが、静かな時間（注3）を持ち始めてからは、次第に自分の利己的な生き方を反省できるようになり、大変に難しいことではありましたが、正直、純潔、無私、愛というM R Aの四つの絶対標準（注4）を生き方の指針にすることを決意しました。当時の飼犬も、家族会議で「正直」と名付けたくらいです。

昭和三十二年から広島に住むことになりました。

当時広島には少人数ですが強力なM R Aのチームがありましたので、早速仲間に入れて頂きました。私達とは丁度入れ違いになった広島県警本部長の木村行蔵ご夫妻、そして広島市長濱井信三ご夫妻が中心となり、M R Aの会合を月一回開いておられました。

ある時、原爆被災地広島の悲しみに対して何か出来ることはないだろうかと主人と一緒に祈っておりましたら、丁度その時、各地で上演され大変な評判を得ていたM R Aの劇「明日への道」(注5)を広島に迎えて、原爆記念公会堂で広島の方々に

見て頂くことが出来ないだろうかという考えを得ました。早速それを市長に相談し、資金、人手とも何の当てがある訳でもありませんでしたが、実現に向けて行動を起こしました。

その結果、百人近くものMRAの方々をお招きして千人以上の観客に劇を見て頂くことが出来たのです。私は一人の人間が神の声に素直に従って行動する時、偉大な力が働くことを知りました。そして多くの方々の力をお借りできる有難さをつくづく味わいました。

昭和三十四年当時、北九州の国鉄志免炭坑閉山に伴う流血の労働争議の記事が、新聞の一面を飾っていましたが、本社に転勤したばかりの主人に当時の十河国鉄総裁から突然、この炭坑への転勤が命じられました。

随分と迷った末、主人は単身で赴任することになりましたが、その時、自分は無私と愛の精神でやると一言漏らしたのを覚えています。

型破りだと言われながら、主人はこの争議で荒々しくなっていた労使双方の心を和らげようと、MRAのチームを招いて映画を上映したり講演会を開いたりしてました。

このように主人の遺産であるM R Aを通して、多くの友人を得、生き方の指針を学んだはずの私ですが、生身の人間ですから人生の不幸や苦しみ、そして悲しみも、神様が私に与えて下さった試練だと頭では十分わかっているつもりでも、ついつい恨みに捉われてしまいがちな我が身に狼狽し、挫折しそうになったことが度々あります。

そんな時、私は心の声に静かに耳を傾け、進むべき道を選んできたのですが、先年、長男の嫁が僅か三十八才の若さで他界した時、私は完全に道を見失い、一歩も前に進めなくなっていました。

余りにも突然の旅立ちでした。

十才と八才のやんちゃ盛りの子二人が残され、私はぼう然として立ちつくしたままなす術を知りませんでした。

数日が過ぎ、やっと心の落ち着きを取り戻した私は、長男、そして孫達と一緒に生活し、彼らの世話をすることが私の選ぶべき最善の道であると考え、新しい生活の第一歩を踏み出すことを決心しました。

子育てを遥か昔に卒業していた私にとって、孫達の教育や日常生活上の躰、世話

など戸惑うことばかりで、大きな山、小さな山にさしかかる度に、子育て現役の娘の手助けが精神的、肉体的に大きな力となりました。

新しい家族となった四人は、「誰が正しいかではなく何が正しいか」（注6）という考え方を基本に、日々の出来事を毎日正直に話し合いました。

孫達に無理強いで失敗したり、悩んだり喜んだりしながら、結局、私自分から最初に変わらなければ、人を変えることは出来ないのだということに勉強させられました。

連日の重労働の疲労が蓄積したのでしょうか、暫くして原因不明の発熱に見舞われ、体調を崩し、結局、慢性肝炎と診断されました。

心を残しての旅立ちであったであろう嫁を不憫ふびんだとは思いつつも恨みの感情を抱き、嫁の母の様々な対応にも不満を感じるようになっていったのでした。

ある朝、再び心の声に静かに耳を傾けてみました。

すると、「大切な一人娘を失い、辛く厳しい生活を送っている嫁の母の気持ちを理解しようとせず、自分のことだけしか考えなかったことを嫁の母に謝るべきだ」という考えが心の中に浮かびました。

何度かためらった後、心の声に従い正直に手紙を書き、これまでのことを詫びました。

すると先方から返信が届き、そこには私の手紙に対する感謝の気持ちと共に自らの非礼についてのお詫びが述べられていました。それからは孫のすこやかな成長を氣遣い便りが関西と東京の間を行きかいました。

昨年突然、嫁の母は六十八才で亡くなりましたが、悲しみの中にも、孫達と共に心から冥福を祈ることが出来たのも、心の声に従い実行することの大切さを体験していたからだと思うのです。(主婦 東京都世田谷区在住)

(注1) M R A

第一次世界大戦後、フランク・ブックマン博士を中心に自己の変革を基盤とする世直し(新しい人間づくり)による新しい世界づくり)運動が英オックスフォード大学に起こりました。(オックスフォードグループ)。これが昭和十三年(一九三八年)に発足したM R A (Moral Re-Armament 道徳再武装)の前身となり、以来、世界史の背後で家庭、社会、国家間の和解をもたらし重要な役割を果たしてきました。「道徳再武装」という表現は、第二次世界大戦を目前に軍備に狂奔する世相を反映したもので、軍備ではなく、「道義と精神の再武装」によってこそ真の平和と民主主義がもたらされるとの理念に基づいたものです。

(注2) フランク・ブックマン博士

(一八七八年—一九六一年) アメリカ・ペンシルバニア州ベンスバーグ生まれ。一九二一年、ワシントンで開かれた軍縮会議を傍聴し、「いかに優れた平和計画も人間性を変えない限り無意味である。むしろ新しい原因となる」ことを悟り、「新しい人間づくりによる新しい世界づくり」を目的とする運動を起こすことを決心した。第二次世界大戦を目前にした一九三八年、軍備の増強に狂奔する世界各国の醜い姿を見た博士は、軍備に代わる道義と精神の再武装が世界の平和と繁栄への道であるとの確信を得て、M R A (Moral and Spiritual Re-Armament) を全世界に向けて提唱した。アジアとの交流にも熱心で、ガンジーや孫文、渋沢栄一とも親交を結んだ。日本には大正四年以来八回にわたって来訪し、広汎多彩な友好関係を築いた。

(注3) 静かな時間

近代生活の忙しさに追われて静かに物事を考える時間が少なくなっている今、毎朝「静かな時間」を持ち心の声に耳を傾け、今日一日の計画を立てたり、昨日の反省をする習慣を持つことが大切だとブックマン博士は説きました。また、「人間は一つの口と二つの耳を与えられたのだから、話す二倍、聞くことが大切だ」とも言われました。

(注4) 四つの絶対標準

複雑に分裂した世界では、人種、宗教、イデオロギー、性別、老若の違いを越えた人類共通の価値が求められています。MRAは、どの民族や宗教の中にも共通して見い出せる普遍的倫理観を、①絶対正直、②絶対純潔、③絶対無私、④絶対愛という四つの道義標準におき、それを生活上の基準として良心の声に聞き、そこから得た考えを実行する生き方を提唱しています。

(注5) 「明日への道」

一九五七年(昭和三十三年)の六月、日本青年団協議会の代表(各県から二名づつ)がブックマン博士に招かれて、アメリカのミシガン州の五大湖の中にあるマキノ島で開かれていたMRA世界大会に出席しました。青年団員の体験を基に、劇を作成、「明日への道」と名づけました。水利の争いを背景に、新旧思想の対立、親子の不和を描いたもので、息子が全てを投げうって正直になることから百八十度の展開があり解決が見い出されたというストーリー。アメリカではワシントンを見初め幾つかの都市で、そして日本でも各地で公演され大きな反響を呼びました。特に住友吉左衛門氏が水泥棒の役を引き受けられたのは衝撃的なことでした。またフィリピンにも招かれ講和条約前の彼地で歴史的な公演を行いました。

(注6) 「誰が正しいかではなく何が正しいか」

「誰が正しいか」ではなく「何が正しいか」という考え方を判断の基準にすることによって、相手の立場を理解したり自分を変えていくことが出来ます。一人ひとりが心の持ち方を変えることによって家庭内の争いから国家レベルの対立に至るまで、数々の具体的な解決がもたらされてきました。多くの人々が「何が正しいか」という基準によって「平和とはただ唱えるものでなく自分から創造していくもの」だと認識した時、世界平和が可能になるとMRAは考えます。



日韓友好の懸け橋に

大木一郎
おおき いちろう

小田原名産の蒲鉾^{かまぼこ}を手^てに帰宅した息子の浩史が、M R A小田原国際会議（注7）の様子を私に聞かせてくれたのは、今から八年前の一九八一年の事でした。

その会議に初参加した浩史は、「国際会議の名前の通り素晴らしい会議だった。アメリカ、イギリス、アフリカ、カナダ、スウェーデン、インド、スリランカ、フィリピン、台湾、韓国等から代表が参加し、日本からも政界、学会、産業界はもとより普通の主婦や学生、そして労働組合の幹部に至るまで実に様々な背景を持つ人達が一堂に会して、世界的な観点から様々な問題を真剣に話し合っていた。とても

素晴らしい勉強をしてきた」と、目を輝かせながら会議の様子を詳しく説明してくれました。

「ほおー、なるほど。それじゃ来年は俺も一緒に行ってみようかな」。

これが私とMRAの出逢いでした。

翌年、浩史に案内してもらい小田原国際会議に初めて参加しましたが、まず今まで私が経験したことのない全く新しい雰囲気にとびつくりしました。それに会議のテーマ自体も私には何だか難し過ぎて良く把握できなかったというのが正直なところでした。

ただ食事の時とかティータイムの時の他の参加者の方々の楽しそうな様子や、国境を越えた人間同士の素晴らしい交流とでもいうべき姿を見て、私も自然にその輪の中に入っていくことができました。この時味わった喜びを未だに忘れることができません。英語の話せなかった私は、外国の方々と自由に話し合っている日本の参加者の方々がとても羨ましく思えてなりませんでした。

今年の九月、私は韓国で開かれたMRA世界大会に参加しました。

成田から一時間四十分程の距離にあるソウルの街はオリンピックの活気に満ちて

いました。対日感情は必ずしも良くないと聞いていましたし、韓国語も全く出来ないのので一体どうなるものかと思っていたのですが、私達を金浦空港で出迎えて下さった韓国MRAの方々の暖かで誠実な対応に頭の下がる思いでした。

その時の感激が未だにさめやらず、時折アルバムや友達になった韓国の方々から頂いたお便りを取り出しては、思い出に浸っています。

ソウルの国立中央博物館の入っている建物は元の朝鮮総督府だったということで、横暴な日本軍閥が力づくで朝鮮半島を支配したその名残なごりを見ているようで大変後味の悪いものでした。また、韓国のジャンヌ・ダルクと言われている三・一対日独立運動の指導者の一人である柳寛順の名前を冠した記念館では、色々と聞くに耐えないようなお話を聞き、「ああ申し訳なかった。どうぞ許して頂きたい」との言葉が、思わず口をついて出てしまいました。

このように様々な悲惨な思い出が残っているにも拘わらず、手厚くそして心のこもったおもてなしを頂き、ただただ感激致しました。

もう一つ強く印象に残ったのが、南北軍事境界線の見学でした。同一民族が敵対しなければならぬとは本当に不幸な事です。そこにいた韓国の若い兵隊さんに祖国の防衛ご苦労様と握手をして激励しましたが、この兵隊さんの中にも、身内や親

戚の方々が北に居られる人もいるだろうにと、言葉には言い表せないほどの胸の痛みを感じました。

このような厳しい現実をこの目で見る事ができた私ですが、実はこの大会に参加するにあたり、こんなことがあったのです。

当時私は運送会社の営業所長をしておりましたが、この営業所は特殊な作業内容を持った営業所で、一年三百六十五日休みはなく、二十四時間三交替勤務のシステムで運営されています。休暇も交替制なので必ずしも日曜日に休めるとは限りません。部下を休ませるために私が日曜日に出勤することも度々ありました。

そういう訳で訪韓のため七日間連続で休むのは容易なことではありませんでしたが、どうしてもこの大会に参加したいと思い、「八月の三日間の夏休みと日曜日を返上しますし、留守中も平常通りの運営が出来るように手配してありますので、許可して頂きたい」と常務と社長に申し込み、やっとの事で許可を貰ったのでした。

ところが出発一週間前のことでした。常務から「韓国行きをキャンセルできないか。留守中に大きな事故が発生したら君は責任上困る事になるぞ」と言われたので

す。

生まれて初めての海外旅行が嬉しくて嬉しくてたまらなかつた私は、突然頭を一発ガツンと殴られたような気持でした。

「私は一カ月前に常務に理由を話し許可を貰つてあるじゃないですか。留守中心配な点は、課長にもよく頼んであるし、事故が発生したら困るなどという気持では思い切り仕事はできません。今ここまで来てキャンセルはできません」と反論する私に常務は、「もし重大事故が発生したら責任を取つて会社を辞める位じゃすまないぞ」と言いました。

私はこの機会を逃したらきつと後悔すると思い、よし、場合によつては職を投げうつても参加しようとい大決心をし、「そうですね、よく分かりました。でも私はどんな事があつても韓国へ行くつもりです。会社を辞めて行つたら問題はないでしょう」と言つて社長室へ行き、常務とのやりとりを説明して、「今日限り会社を辞めさせて下さい」と言つてしまいました。

社長は「どんなことがあつても定年まで会社を辞めてはならない。とにかく韓国へは行つて来なさい」と言つてくれたので会社は辞めなくてもすみました。

成田を出発し、飛行機の小さな窓から広々とした雲海を眺めているうちにそんな

ことはすっかり忘れてしまいました。

期待した通り素晴らしいソウルの街でした。本当に参加して良かったと思えました。色々な意味で幅広い勉強ができ、少しですが韓国という国が分かり、そして多くの友人ができ何物にも代え難い心の財産を得ました。本当に夢のような七日間が一瞬のうちに過ぎ去りました。

帰国後、それまで私にとって未知の国であった韓国の歴史や言葉の勉強をすることにしました。

今後両国が近くて遠い関係ではなく、近くてすぐ行ける国になるように、そして隣の国同士共に手を取り合って世界の平和のために尽くすよう努力すべきだと思い、私は日本と韓国のために何かお役に立てる事があるならば、どんな小さな事でも行動に移していくことを心に決めました。

これから今まで以上にMRAの会合にも参加させて頂き、人生の生きがいをMRAに求めていこうと思っています。

秋頃もう一度、今度は妻と弟夫婦と四人で韓国を訪れようと今からプランを立てています。そしていざれ台湾、フィリピン、オーストラリア、インド、スイス、イ

ギリスなどにあるMRAセンターも訪ねてみたいと思いますが、少し欲が深いでしょうか。(会社役員 静岡県清水市在住)

(注7) MRA小田原国際会議

毎年世界各地で開かれるMRAキャンペーンの一環として、日本でも昭和五十二年(一九七七年)より世界各国から代表を招いてMRA日本キャンペーンが小田原、箱根、大阪、神戸、東京、埼玉など各地で開催されています。その皮切りとして小田原市のアジアセンターで行われる小田原国際会議は、実業家、労働界の人、教育者から主婦、学生を初め、日本在住の留学生、会社員、難民などの外国人も含め誰でも気軽に参加して本音の意見交換が出来る場として好評を得ています。



スイス・コーで学んだ 静かな時間

内山順恵
うちやまゆきえ

「憧れのスイスに行けるノ」と、スイス行きの話にためらうことなく飛びついた私でした。

MRAとはどんな意味か、一体何をしている団体なのかも知らず、「行ってみるか」という父の言葉に素直に従い、進路を決める大切な時期である高校二年の夏休みの一カ月間を、スイス・コーのマウンテンハウス(注8)で過ごすことになりました。

もう九年も前の話ですから、そこで行われていた会議の内容は殆ど忘れてしまいました。が、高校生活を何の目的も持たずに漠然と過ごしていた私にとって、ある種

のカルチャーショックを受ける内容であったことを覚えています。

難民、ゲリラ、アパルトヘイトなど、戦後の平和な日本に生まれ、何一つ不自由なく育った私にとってテレビのニュースでもなく社会科の教科書でもない、現実の世界の動きを初めて垣間見る機会となりました。

一人ひとりの力は小さくとも、世界のあらゆる問題の解決に取り組み世界を良い方向へ動かそうとしている人々の存在を知り、そして平和と表裏一体である戦争というものの恐怖を身近に感じることも出来ました。

世界の現状を知ろうとさえしなかった私の姿が浮き彫りにされたお陰で、世界中の日本の立場というものが考えられるようになりました。

一日一日がとても中身の濃いコーでは、食事の時間も大切な交流の場です。たっぷり時間をかけて、世界中から集まった沢山の人達とコミュニケーションを図ることが出来ました。

そして朝は今日一日をどう過ごそう、夜は今日一日これで良かったのかとか、自分を見失ってしまわないように心の声に耳を傾ける静かな時間を持つことを教えられ、それはその後の私の生き方に大きな影響を与えました。

コーで過ごした一ヶ月間で、世界の中の日本、アジアの中の日本ということを感じ、また、正直、純潔、無私、愛の四つの絶対標準というM R Aの精神に共感した私は、看護婦になることをコーではっきりと決心しました。

母が看護婦であったことや父が大病をしたこともあり、看護婦になりたいという漠然とした気持は持っていたのですが、日本では看護婦の地位が低く見られていることや労働条件が厳しく綺麗ごとだけでは済まされないことなどが、決心をためらわせていました。

コーでのある朝、静かな時間を持っていると、「自分は何とつまらないことで悩んでいたのだろう。自尊心が傷つくのをおそれていたに過ぎない。自分の望む進路を自由に選択出来る恵まれた国に自分はあるんだ」ということに気付きました。

コーから帰った私は、社会の役に立つ仕事をしたいという気持を忘れることなく、やがて看護学校に入学しました。

それからは決して平坦な道ばかりではありませんでした。人の命の尊さやそれを預かる恐さが身にしみて感じられ、毎日が緊張の連続でした。看護婦不足で月に十日も夜勤があり、その上二人で五十人以上の患者さんの命を預かることもありまし

た。体はくたくたに疲れ、心に余裕がなくなります。睡眠不足に疲労が重なり、患者さんに笑顔を絶やさず優しい言葉をかけることさえ難しくなってくるのです。

そんな私を助けてくれたのがコーで学んだ静かな時間でした。

朝、ほんの少しの間、例えばミーティングの前に注射の準備をしながら、「今日一日をどう過ごそうか。あの患者さんにはどう話しかけてみようか」、そんなことを自分に問いかけるのです。そして夕方もう一度、本当にあの接し方で良かったのだろうかと反省してみるのは。

こんなことを実行しているうちに心に余裕も生まれ、それが伝わるのか、私に何でも隠さず話して下さる患者さんが現われるようにさえなりました。人間相手の仕事ですから常に緊張はしますが、喜びも感じます。MRAはそんなことも私に教えてくれたような気がします。

戦後の日本という恵まれた環境の中で何一つ不自由なく育ったという事実をMRAを通して再認識させられた私は、看護婦になる決心をしました。それからの九年間、ずっと純粹な気持でいた訳ではないけれど、社会に貢献できる仕事を選んだことを今でも誇りに思っています。

現在は家庭に入り一児の母として家事育児に追われる毎日ですが、時期が来たら看護婦への復帰をと考えています。そうなれば今まで以上に忙しい日々を送ることになるでしょうが、自分を見失うことのないように静かな時間を持ち続けていこうと思っています。

そして私以上に物質的にも経済的にも恵まれて育つであろう娘のために、これからの世界での日本の立場、その中で自分がどう生きていけばいいのかということを考えてくれる環境を作ってあげたい（両親が私にそうしてくれたように）と思っています。（看護婦 茨城県行方郡在住）

（注8）スイス・コーのマウンテンハウス

スイスのジュネーブから車で一時間半、眼下にレマン湖を望む標高一千メートルの村コー（Coeur）に、M R A世界会議場「マウンテンハウス」があります。一九〇二年に豪華ホテルとして建てられましたが、第二次世界大戦中は避難民の収容所として使われすっかり荒れ果ててしまいました。

戦後間もなく、「荒廃したヨーロッパの再建と世界の融和のために、人々が心を開いて話し合える場所を、戦火を免れたスイスが提供しよう」という確信を持ったスイスの百ほどの家族が大きな犠牲を払ってこの建物を買取り修復しました。以来、M R Aの世界会議場として人々や国家間に融和をもたらす貴重な場を提供してきました。毎夏、世界中から何千人という人が集まり「青年のための会議」、「アジア・アフリカ・太平洋地域諸国による会議」、「産業人会議」などに参加します。コーでは単に会議に参加するだけではなく、料理、サービング、皿洗い、コーラグループなどその運営に参画することを通して、世界の人々と友人になります。静かで美しい環境の中で、世界中からの参加者が力を合わせて働き心を開いて話し合うことにより、静かに自己を見つめ直し、相手の立場に立って物事を考えることの出来る心が育まれます。



頑固は自分の 持ち味だ!

長島 範明
ながしまのりあき

今から何年前のことだったのかはつきりとした記憶はありませんが、亡くなられた高瀬正二元MRA会長からMRAのことを、一度聞かされた覚えがあります。今思えば、高瀬さんがMRAの法人化を目指して関係省庁に盛んに働きかけておられた頃に違いないと思うのですが、当時は私自身、MRAの何であるかさえも分かっていなかったで、「絶対正直」などという言葉聞いただけで、これは自分の入り込む世界ではないと判断して、そのまま忘れてしまっておりました。

その高瀬さんが健康を害された二年ほど前、高瀬さんからゴルフ場の経営に積極

的に参画してくれないかと言われ、私もお手伝い程度ならばと気軽にお引き受けしたことがきっかけで、結局は会社の代表権まで預かることになってしまいました。

そんなことがあって暫くすると、一時期健康を取り戻された高瀬さんが会社へ元気なお顔を見せられ」ところで長島君。君もMRAに参加せんかね」と半ば強制的に入会を勧誘されました。その時私は反射的に、「MRAの世界は私の世界ではありませんが、会長のお顔を立てて、会費位は払わさせて頂きます」と返事したのが、私とMRAの最初の出逢いといえは出逢いでした。

その頃はゴルフ場の経営も、私の不慣れな故もあって決して順風満帆とは申せませんでしたし、MRAについては、殆ど関心を払う暇がなかったというのが本音です。また、絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛というMRAの四つの道義標準にしきりにこだわっている私に高瀬さんは、「俺だってそんなこと完璧に出来やしなよ！ただ折にふれてMRAに触れることが大切で、そうしているうちに何とかなるもんだよ」と声を上げて笑っておられたのがとても印象的で、私の最初の強烈なMRAとの出逢いとして未だに忘れることができません。

その高瀬さんが、一昨年の夏にちよつとした無理が崇^{たか}つて不帰の旅に旅立たれ、

青山斎場で会社、ゴルフクラブ、そしてM R Aの三者の合同葬儀がしめやかに、且つ盛大に執り行われました。

私がたまたまその時の葬儀委員長をお引き受けしたのがご縁で、社団法人国際M R A日本協会(注9)の理事にも御推薦を戴き、M R Aとの積極的なお付き合いが始まった訳です。

初めて小田原の国際会議に参加し、「心の国際交流」というテーマでの討議に参加した時、やっぱりこれは自分の世界ではない、恥ずかしいけれど自分はこのような会議に参加する資格など持ち合わせていないと、非常に複雑な思いを抱いたことを忘れません。

ところがその後、不本意ながらもM R Aの集まりに何回か出席しておりますうちに、己れの頑迷さが何となく自分で判るようになってきました。

それまでは「頑固は自分の持ち味だ」と誰彼となく主張して、常に相手にチェンジを求めてきました。議論する時も相手をやり込めることにのみ喜びを感じていましたが、時には自ら譲ることによって問題が一件落着くことが判ってきたのです。この自分の中の少しづつの変化に本当に気付いたのは、昨年長女に結婚の宣言をされた時のことでした。

大学を出て暫く外銀の東京事務所に勤めていた娘が、突然英語の勉強にアメリカへ行きたい、それまでの給料、ボーナス等を全部貯金してあるから、二年位は親の世話にならなくても勉強を続けられるので許可して欲しいと言ってきたのは三年ほど前のことでした。

しかも、娘が留学したいというロスアンゼルスには私の甥夫婦が日本の或る銀行の駐在員としてたまたま住んでおり、彼らから娘の留学の手伝いをして上げるとまて言われると、ノーと言う訳にもいかず、結局二年間の約束でアメリカ行きに同意いたしました。

仕事の関係で私自身も年に一度位は外国に出掛けることがあり、その都度娘の様子をそれとなく観察しておりました。真面目に勉強を続けている様子で一先ず安堵はしたものの、やっぱり結婚相手は日本人でなければと常々考えておりましたから、アメリカで相手を見つけてしまいう前に何とか帰国させなければと思っていました。娘にも機会ある毎に、外国人との結婚は許さないと申しておりました。

ところが約束の二年が過ぎて帰国するなり、結婚相手が見つかったから結婚したい、しかもアメリカ人だと言いだしたのです。

私にとってそれは大きなショックでした。

娘は私がノーと言うだろうということを見越して、「パパが反対しても私は結婚するからね！」と言いました。

複雑な感情が私の頭の中だけでなく、身体中を駆け巡るのが分かりましたが、不思議なことに、以前のように頭に血が昇ることはなかったのです。

M R A による変化が私の中に芽生え始めたからに違いありません。

私は「分かった。お前の人生はお前のもの。自分で決めた以上、パパは反対はしない。だがお前を幸せにできる男かどうか私も知りたいから彼に会わせなさい」と娘に言いました。

暫くして来日した彼と私は色々な話をしました。最初は彼も随分とあがっていたらしく、トンチンカンな返答もありましたが真面目な男であることが判りました。私は娘の選択に間違いのなかったことが嬉しくて、その場でオーケーを出してしまいました。二人は翌日早速、アメリカ大使館に行き婚姻の手続きを済ませました。

年号が平成と変わったこの一月に、東京のホテルで披露宴を開きました。

人生に「もしも」はあり得ないと言うものの、もしも私に M R A との出会いがな

かったならば、このような形で二人の結婚を許すことはなかったに違いないと私は思ったので、思わずその席でMRAのPRをさせて戴きました。

これも全て高瀬さんによるMRAとの出逢いがあったからこそと肝に銘じて、これからも微力ではありますが、何らかの形でMRAに恩返しをしてゆきたいと考えております。(会社社長 東京都目黒区在住)

(注9) 社団法人国際MRA日本協会

昭和五十年の発足以来、各種国際会議や講演会・研究会の開催、海外研修生の派遣等活発な活動を行ってきた国際MRA日本協会は、昭和五十九年八月に社団法人として文部省の認可を受け、その後も事業の一層の拡大を目指しています。

各種資料のご請求、会合や事業のお問い合わせは左記へどうぞ。
〒113 東京都文京区千駄木四―十三―四

社団法人国際MRA日本協会

TEL〇三(八二)(三七三七) FAX〇三(八二)(六四七九)



最高の出逢い

泉 潔子
いづみ きよこ

一 昨年の十月に小田原市で開かれたM R A 国際会議に、M R A のことは何も知らない私でしたが、相馬ご夫妻のお誘いで参加させて戴きました。会場に着きますと、どの参加者の方々も心が豊かで地位名譽のある方のように見え、「これは大変なところで足を踏み入れてしまった。どうしよう」という迷いが生じ、心の平静を保つのが精一杯の私でした。

「心の国際交流」というテーマもそれこそ宇宙の彼方の出来事のように、私は先ず、自分自身の心と闘わねばならない有様でした。

これが後に私の生き方を変えるとはいいもしなかったM R Aとの初めての出逢いでした。

相馬雪香さん(注10)の著書「心に懸ける橋」が、私の人生を大きく変えました。

私は深く感動し、幾度となく読み返しました。私が困難に直面した時、それは教科書となり私を救ってくれます。「夫婦の愛は一生かけて育てていくもの」という言葉は、私の胸を本当に熱くしました。

それまで私は、家庭と仕事を両立させなければならぬことに対する長年の不満が積み重なり、いつも重荷を背負った人生を歩んできました。医療に携わる者としての自分は偽善者で、患者はその犠牲者だったのかも知れません。

「主人が死んだら私も死にたい」という雪香さんの純粹な言葉に私は泣かされました。もしお二人との出逢いが私に対する神の計画であるのなら、一体どう感謝すればいいのか分かりません。

看護婦の国家試験を受けた時暗記したはずなのに、すっかり忘れていたナイチンゲールの誓詞が新たな力を持って私の心に蘇よみがえってきます。

ナイチンゲール誓詞

われはここに集いたる人々の前に厳かに神に誓わん

わが生涯を清く過ごし、わが任務を忠実に尽くさんことを

われはすべて毒あるもの、害あるものをたち、悪しき薬を用いること無く、また知りつつ、これをすすめざるべし

われはわが力の限りわが任務の標準を高くせんことを努べし
わが任務にあたりて、取り扱える人の私事のすべて、わが知り得たる一家の内事のすべて、われは人にもらさざるべし

われは心より医師を助け、わが手に托されたる人々の幸せのために、身を捧げん

私は母と姉妹を、昭和二十一年に旧満州で亡くしました。やがて視覚障害者となり、心の眼まで失いかけ、M R A の四つの絶対標準からは程遠い私でした。

絶対正直……私の不正直さを書き出せば切りがありません。同情されるのが嫌で、見えないものまで見ると悲しい嘘を何度ついてきたことでしょうか。

それが今は、心が自由になったとでもいうのでしょうか、点字を恥ずかしがらずに堂々とやれるようにもなりました。自分の持っているものを惜しみなく与えられる気持になったのです。

絶対純潔……二十年間一緒に過ごしてきた主人にさえ愛を確信出来なかった私は不純だったと思います。私がかもし死んでも、主人は強い人ですから平然と生きていくだろうと思っていました。

絶対無私……とても私の強い私は、自分ほど他人に思いやりのある人間はいないなどという、とても思い上がった気持を持っていました。

絶対愛……全身全霊で愛すること、そして命を賭けて愛するという偉大な愛の存在をMRAによって初めて知りました。フランク・ブックマン博士に感謝しながら私は祈ります。

「神様、私を良い人間にして下さい。この視力障害に感謝致します。この障害が私を清め、そして力を与えてくれるのです。こんな私でも少しでも世の中のお役に立つことが出来るよう、計画を与えて下さい」。

無力な私ですが、真理を教わりたくて必死に祈るのです。そうすると、その心が肉体に行動として現われるのです。かつて経験したことのない変化が心に現われるのです。

気持ち良い朝の目覚めや朝食の支度さえが楽しいのです。お弁当を作っても、娘がそれを食べてくれるという当然のことが嬉しくてたまらないのです。毎日のことだからと簡単に済ませていたお味噌汁の中身にさえ心を込められるのです。

最近、私の周囲は急激に変化しています。時間がとても大切に思えてきました。私は家の雑用を済ませるとすぐ机に向かいます。以前はペンを持っただけで吐き気さえ覚えたのに、今は胃もすっきりとし、頭も冴えてくるのだから不思議なものです。正直に書くこうとすれば、文章は自然に溢れ出てくることを知りました。

不義理をしている恩師へのお詫びやら礼状やら、一人ひとりの顔を思い浮かべながら手紙を書いていると、時のたつのさえ忘れてしまいます。

朝、時間をとって静まった時に心に浮かんだ人の名前、それまであまり会いたくないと思っていた人でも新しい気持ちでお会いしに行く、何のこだわりもなく話が出来ることを経験しました。人と人とを結ぶ「心の懸け橋」はこういうことから始まるのかなと思うのです。

以前、日赤病院に入院している友人を見舞った時のことです。彼女は産後一カ月にして、腫瘍性大腸炎という難病を患って入院しています。口から食することを禁じられ、点滴を命の綱にして生きていますが、彼女の赤ちゃんは乳児院ですくすくと育っています。

私は彼女の何かを悟ったかのような眼差しを見て、一体何があったのと思わず尋ねました。最悪の状態の時に見た彼女とは別人のように見えたからです。

「子供のためにどうしても生きていたい。言葉で言い尽せぬほど我儘だった自分が変わったのは病気のおかげ」という彼女の言葉に、私は衝撃を受けました。この悲劇の中で彼女の心は神に近づいていたのです。

私は流れ落ちる涙をどうすることも出来ず、「たとえ病室にいたとしても、あなたに出来ることがあるでしょう。赤ちゃんはまるであなたを力づけようとしているか

のように元気に育っているのだから、いつか手をつないで歩ける日がきつと来ると信じているわ」と言つて病室を後にしました。

女は弱し、されど母は強しといいますが、本当に「心の革命」は色々な場所で、様々な形で行われていることを実感いたします。

心を尽くし、思いを尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、神の正しい道に自らの生涯を賭けられたら最高の喜びです。

私の心の眼はMRAによってやつと開かれました。たった一度の人生にたった一人しかいない私です。愛を心に伝える橋になりました。

小さな事から、女性として母として、自らを変えていきたいのです。自分の事だけ考えてはいけけない、「自分のあり方が国のあり方である」(注1)とMRAで学び、今まで関係ないと思つていた国家の安全や繁栄も、一人ひとりの思いによって成り立つことを実感として感じられるようになりました。

それがやがて祖国愛、人類愛、世界愛という大きなものにつながっていくと信じています。(理学療法士 東京都品川区在住)

(注10) 相馬雪香さん

明治四十五年(1910)に尾崎聖堂(行雄)の三女として東京に生まれる。女子学習院卒業後英国に留学。昭和十二年、相馬藩主末裔の相馬恵胤氏と結婚。昭和十四年に初めてMRAを知る。現在社団法人国際MRA日本協会副会長、尾崎行雄記念財団副会長。他に日本退職女教師連合会、難民を助ける会、日韓女性親善協会などの会長も務める。

著書「心に懸ける橋」。「フランク・ブックマンの秘訣」(ピーター・ハワード著)、「世界を再造する」(ブックマン講演集)の訳書あり。

(注11) 「自分のあり方が国のあり方である」

私達は、相手が悪い、職場が悪い、政治が悪い、社会が悪いと周囲に責任を求めがちです。それらも確かに変わるべきでしょう。しかし、最も変わらなければならないのは自分自身である。MRAは考えます。自らが変わった時、家庭や職場も変わり、社会や国にも影響を与えるでしょう。「自分のあり方」が、即ち「国のあり方」なのです。

発行

平成元年10月10日

社団法人 国際MRA日本協会

〒113 東京都文京区千駄木4-13-4

TEL:03(821)3737 FAX:03(821)6479

頒価 300円

JWA